

一月激闘を五四運動の地平とせよ

——ML同盟東大細胞委員会——

全国の戦闘的労働者・農民・学生諸君！
東大闘争全学共闘会議は不滅であり、闘う
人民は不屈である。

戦後日本の階級闘争史上、かつて無かった
血で血を洗う激烈な闘いとして一八〇一九日
の列品館—解放講堂の死守の闘い、そしてそ
れに相呼応する神田—御茶の水—本郷での街
頭バリケード戦があった。

この、日本階級闘争を新たな地平におし上
げた闘いを、ML同盟と解放戦線は、指導性
においても戦闘性においても、全共闘革命派
と共にその先頭に立って戦い抜いたことを自
信をもって確認する。数多くの同志が獄中に
あり、さらに権力の弾圧が激しくなるではあ
ろうが、全共闘の戦いを、不撓不屈の精神で
徹底的に闘い抜くことを、闘うすべての学
友に宣言する。

一八〇一九闘争の中で、政治過程はいっき
よに凝縮され、真の対立者としての、全共闘
革命派と帝国主義国家権力との衝突が暴力的
になされた。非和解的階級対立・政治対立を
止揚するものは、暴力であるが故に、帝国主
義国家権力が政治的に使用しうる最大限の暴
力が動員された。東大闘争の全過程を通じ
て、とりわけ、一八〇一九闘争によって、階
級的中間部分政治的中间部分は動揺し、大学
共同体的統一を解体された。典型として、進
歩的文化人がすでに反動的文化人ではなくな
ったことが、数多くの追求、弾劾、集会によ
って大衆的に明らかにされた。支配者の大学
が、その権威のために国家から与えられてい
た一定の相対的自立としての国大協路線の破
綻に政治的に示されること、東大闘争が帝
大解体にまで深まろうとするや否や、それを

集約するのは国家権力であり、突破して真に
闘い得るのは全共闘革命派である。
十二月一月と政治的緊迫の中で、全共闘は
いかに闘うのかが鋭く問われ、帝国主義国家
権力と闘うのか否かで全共闘は混乱してい
た。

支配者内部は一定の矛盾を孕みつつも、全
体としては「秩序回復」において一致してい
た。すなわち安保・沖繩と並んで大学問題を
「死活の政治課題として掲げた三選佐藤は、大
学問題をまず「治安問題」そして「大学改
革」として位置づけ、公安・文部の体制を整
え、慎重に動き出した。

プチブルジョア階級として位置しながらも
「秩序回復」においてブルジョアジーと一致
した加藤は、国家権力のお先棒かつぎの役目
を果たし、支配者集団の末席を一時与えられ
た。かくの如く形成された支配者集団は、十
月からの入試中止の危機、就職取消し、留年
・目に余る共闘会議の暴力等を宣伝していた
が、十二月下旬に至るや「今や秩序回復の
時」との叫び声でいっせいに組織的に動きだ
した。

十二月二十九日「東大入試中止、但し、一

月十五日まで再考の余地あり」とするすぐれに政治技術的なとしてセンセーショナルな発表が政府と大学当局によってなされた。

東大闘争が深くえぐり出した、教育学問の腐敗、停滞、反人民性などをいっさい隠蔽し「入試復活」せねばという、無内容なスローガンが、あらゆるマスコミ、そして世論の中に氾濫した。かくの如き悲喜劇をおこしつつも権力の冷徹な政治的意図は進行した。

支配者集団の「今や秩序回復の時」という進軍ラッパに従って、学内では右翼が多数派を獲得していった。右翼は、就職・留年等の現実的打算の上に、今や「大学の社会的責任」を果たすべき「入試実施」を実現しなければならぬという政治的資本をもとにして、中間派学生を吸引し、十二月末、法・経において多数派となった。

さて、日共修正主義者は、学内での孤立をかううじて民青外入部隊の大量投入でもちこたえて来たが、この期に至り、彼らの「民主化」の金科玉条たる四項目をおろして、統一代表団の下に右翼への癒着を開始した。

駒場においては、民青都学連部隊に守られて、十二月十三日、デッチあげ代議員大会が

もたれた。医学部における右翼と民青の癒着は、スト破り以来授業もまま間々の日々を送っていた右翼・エゴイスト集団と、全く一握りの民青とが、一方では更に効率よくスト破壊すべく、一方では政治的に利用すべく、デッチあげ学生大会としてなされた。

かくの如く野合をこげた右翼、民青の統一代表団は年末年始を返上し、大学当局との間で闘争庄殺のための「確認書」作成をおこなっていた。

帝国主義国家権力の全面登場と、そのヘゲモニー貫徹の前段階として、学内秩序再確立の動きは全学集会を頂点として進行し、その政治的直接的結果として学生大会があった。学内秩序回復を阻止し、さらにはわれわれの前面に登場する国家権力との対決を最大限準備することが、一月初旬の政治任務として全共闘に課せられていた。

まず八日夜、全学集会の予定される可能性のある農学部グラウンド征服の直接的目的と、全学バリケード封鎖への一歩として農一・二・新館の封鎖闘争を、全都学生解放戦線の参加の下に行なった。この軍事的行動によって、事実上学内での全学集会は不可能とな

り、我々が十日を目前にして何をなすべきかが全共闘で激しく、討論された。それは、東大闘争の一年に及ぶ内容をいかに集約し、さらに前進飛躍させるのかを問う、激しい党派闘争・大衆闘争の場であった。わが東大解放戦線と全学闘争連合(闘う大学院生の組織)は、以下のように方針を提起した。

九月七日の病院前への民青外入部隊の登場以来、一・一三図書館封鎖、一・一二全学封鎖、駒場一・一三デッチあげ代議員大会、一・二六デッチあげ医科学学生大会等々と、公然たる闘争破壊・スト破壊を大量の全国動員による民青部隊によっておこなって来た日共民青は、一貫して学内機動隊の役割を果たして来た。我々は、全学バリケード闘争を主張した。帝大解体の二重権力創出・人民戦争—解放戦線路線の下に、学内から反革命を一掃し、国家権力と対決する内容としてある。この位置づけの下に、教育学部を根拠地とする民青外入部隊を学内から追放する必要がある。この全学バリケード封鎖闘争以外に、この緊迫した政治局面を勝利的に前進することは出来なかった。

この局面において、当初方針を持ちえな

った社青同の諸君は、九日夜の行動において、工学部二号館封鎖を行なった。この行動は、全く無意味な行動である。建物封鎖拡大の延長上に全バリが位置するのではなく、反革命追放の延長上に全バリが位置するからである。実際、建物を封鎖しても、それを守る部隊が攻める部隊より弱ければ、直ちに解除される。また「一対一的」に民青に対応するのは誤りであると弁解する。

まさに、この時期において全学バリケード闘争を貫徹する闘いこそが、民青との「一対一的」対応を克服する方針だったのである。

反帝学評諸君の動揺とは別に、大混乱を極めたのが、革マル、フロントであった。この自治会民主主義の枠内では律しきれない、いっさいの政治的仮象が剥ぎとられざるを得ない局面での、彼らの無方針ぶりは当然であった。九日夜、革マルはあれやこれやと主張したあげく、民青のいない、理一号館封鎖を考えた。フロントは、破廉恥にも九日夜から駒場へ行くという、露骨な闘争放棄をおこなうとした。しかし、闘う学友の猛反撃にあい、結局行き場を失くし、革マルと仲良く理一号館へと向った。

さて、九日夜の闘争は、反帝、革マル、フロントと別行動をとりながらも、全体的にわが学生解放戦線の教育学部攻撃に包摂され、その後方作戦の役目を果た結果となった。学生解放戦線、全共闘、全共闘に結集し闘う学友を主力とし、日大全共闘、中大全共闘、などの支援下に教育・経に果食う民青外入部隊追放作戦が開始された。学生解放戦線と全共闘の勇敢な攻撃で、第一バリケードが撤去される寸前に、日共の要請で学内に機動隊が導入された。この時早くも、革マルは早稲田に、ブンドは任務放棄よろしく中大へ消え去った。解放戦線・全共闘は、第一回目機動隊導入後、再度隊列を整えて対民青追放闘争を堅持した。しかしながら、またもや機動隊の導入があり、国家権力に守られた日共修正主義者を学外へ追放する闘いは一旦中止せざるを得なかった。

さて、十日全学集会は街頭を機動隊が守り、会場入口を民青外入部隊が守り、演壇周辺を教官が固めるといった、各自の政治関係を見事にあらわした配置で進行した。この幾重ものバリケードを突破し、グラウンド内に突入した全共闘部隊は、更に集会参加者の中か

らもデモに加わる者を含め、約三百で粉砕行動を展開した。

十項目確認は、六・一七機動隊導入を何等自己批判したものでなく、まさに一八、一九の国家権力の大量投入を用意する、潤滑油としてあった。六・一七機動隊導入自己批判が書かれ、人命の危機以外は導入しないと書かれてはいるが、それとは全く裏腹に機動隊導入が確認書を潤滑油としてなされたのである。我々が七項目で表現し、バリケード闘争で表現してきたものは、豊川、上田両名の退官でも何でもない。新たな処分制度を考えることでも何でもない。我々は、かくの如き欺瞞的確認書を粉砕せねばならない。

十一日駒場デッチあげ代議員大会では、民青、右翼がこの無内容な確認書に基づいてスト解除を捏造しようとしていた。従って、十日夜から民青外入部隊の果食う明察寮食解放闘争が激烈に闘われたのである。この民青駒場追放の闘いは、十、十一日と中執とかで姿を消した革マルを除いて英雄的に闘われた。

九日から十一日に至る、学内機動隊との正面きつての闘いこそが、全共闘内部におけるML同盟と解放戦線の革命的権威を確立し、

右往左往する諸党派さえもまき込みつつ、一八、一九闘争への隊列を強化することを保証したのである。

大学当局、日共修正主義者というすべての道化を背後におしやり彼らが掃き清めた道を帝国主義国家権力が全面登場した。万に及ぶ機動隊、四台のヘリコプター、数台の放水車、幾千とも知れぬガス弾、激薬の「催涙液」、ピストル部隊、プロフェシヨナルナリオンチ部隊、等々まさに日本学生運動史上、そして戦後階級史上空前の大弾圧が、東大闘争に加えられた権力の弾圧に抗して英雄的に闘っている解放講堂—列品館の同志に呼応し、一八、一九日の両日、神田、御茶の水、本郷は国家権力の制圧下から、闘う人民によって解放された。その質においても、時間においても、広さにおいても、一〇・二二新宿闘争をはるかに上回る街頭バリケード闘争が労働者市民の結合の下にかちとられた。これは、人民戦争の更なる前進であった。

一八、一九闘争は、解放戦線の優れた同志、今井君が最後の時計台放送で語った内容でもって端的に表現できる。すなわち「われわれの闘いは勝到でした。再び闘う学友によ

って時計台放送が開始されるまで、一時時計台放送を中止します。」

東大闘争全学共闘会議は不屈である。一月二十四、二十五日と駒場、本郷において公然と再登場した全共闘は、教授への叛逆をその根本的矛盾とする、医局員、助手、院生の闘いを基底に持ちつつ、さらに十八、十九を中心に一月の事態に対する加藤ならびに教授総体の追求を開始している。この闘いは加藤ならびに教授総体の犯罪性を暴露することによって彼らを追放する闘いとして、すなわち教授追放講座解体への闘いとして不断に進展していくであろう。すでに田村教養学部長、大内経済学部長への追及が大衆的にかちとられていく。

この、学内的な運動の再構築はしかしながら一八、一九日闘争以前の学内的運動と質的に異なる。帝国主義国家権力との対立が本質的対立でありこの対立を死をも賭して闘った者が構築する運動は、労働者・人民との結合によって、再度一八、一九闘争により一段と飛躍した闘いを用意する運動である。すなわち、二・四沖縄ゼネストと呼応して、二・四闘争が闘われ、二・一一の万に及ぶ日大闘争

全東大の助手、院生、学生と共にこの闘いを押し進めるであろう。そして、全国で燃え上っている学園闘争の軸としての任務を貫徹する。

もはや東大闘争は、日本階級闘争の一つの軸をなしており、日本帝国主義権力とその秩序に対する徹底した闘争となった。

安保粉砕・沖縄解放をスローガンとする四・二八沖縄ゼネストへそして、その根拠地として二月と三月の全国大学の権力闘争は決定的な重要性をもっている。

再度、一層強固な全学バリケード封鎖へ、我々は進撃する。

かくしてはじめて、全国の帝国主義的大学秩序を根底から粉砕する全国学園闘争は切り拓かれる。こうしてはじめて、安保粉砕・沖縄解放闘争と結合し、労働者階級と結合し、七〇年代の日本階級闘争一構成部分としての革命的學生運動の役割をはじめて果すことができるのだ。

「確認書」と称する帝国主義の手先と裏切者の「終戦宣言」を粉砕し、本当の帝国主義との闘いはむし、ろこれからはじまる事を確認せよ！

勝利の闘いをかちとり二・一一の全国的学園闘争との結合を用意する闘いであり、全日本の学生運動の新たな連帯を、帝国主義や大学解体のスローガンの下に、帝国主義教育支配秩序への叛逆からさらに労働者階級との結合をもって帝国主義打倒へと至る闘いである。

五・四学生運動がきり開いた地平に続け！
帝国主義秩序粉砕！二重権力へ邁進せよ！

帝国主義・資本家階級支配の大学が労働者階級人民の大学が革命的學生による自治か教授会自治（参加）があっても事態は同じだか？、全国大学高校における造反の軸としての東大か、文部省—国大協路線の吸収された東大か？、問題は厳として提出されており、この革命と反革命の対決が再度として一層高い質で展開されつつある。

一貫として、東大闘争を全責任をもって指導し、その、最先端で闘いぬいてきたML同盟東大細胞は各種の日和見主義や闘争の昂揚期にあわててかけつける投機分子を粉砕しつつ、帝大解体—二重権力の闘いを断固として押し進めるものであることを宣言する。

文部省—加藤（教授会）—民青の「秩序派、正常化連合」に対して、我々は全共闘として

全国の革命的先進的学友諸君！

帝大解体—二重権力の闘いの道を共に歩もう！日本マルクス・レーニン主義者同盟東大細胞は共に最後の最後まで闘いぬくことを、宣言しかつ呼びかける。「赤光五八号より一部転載

一・一八—一九日、八千五百の機動隊導入を謀って我が戦士を傷つけた文部省—加藤（教授会）—民青への血債は必ず返される。東大において、大衆的な闘争—革命的な學生の再決起ははじまっている。